

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟 選

西村 和子 選

井上 康明 選

片山由美子 選

日傘して小さくなりし世界かな

姫路市 田辺富士雄

△評▽争いの絶えないこの世を視界から遠ざけ、自分の身の回りを大切にする。日傘がそんな生き方を表すように思えた。

筆庄の熱き履歴書雲の峰

大阪市 すずしろゆき

△評▽筆庄が強いのではなく熱いのだ。懸命に職を得ようとする焦燥感がそこに表れている。

しをりひも畳に垂るる大暑かな

大野城市 野分 のわ

空くらし泉の芯の水新た

大阪市 佐竹 三佳

香水や心変わりと瓶の数

東京 夏目 そよ

すつと閉るゼリーの傷は海に似て

加古川市 石村 まい

旧友の葉書かたへにビール酌む

佐世保市 相川 正敏

登山靴絡めて渡る溪の水

福津市 瀧 あき子

家捨つる日傘の母と白き道

川越市 益子さとし

日輪を田の面に眺め水すまし

松本市 伊藤 和夫

廃屋となりし生家のかたつむり

川越市 大野有之介

△評▽住む人もなくなった生家に見いだした小さな生き物に、懐かしさと思いが凝縮されている。五感に訴えてくるようだ。

片蔭の直線多し大手町

つくば市 村越 陽一

△評▽人工的な官庁街の直線美を描いて、涼しさを感じさせる。明暗の対比もあさやか。

颯爽と日傘の男御堂筋

大阪市 浜崎美智代

南天の花をこぼさず蜘蛛の網

小田原市 林 梢

口拭ひまた掬ひけり岩清水

北本市 萩原 行博

葦切りの声押し分けて郵便夫

鹿嶋市 津田 正義

海原をあまねく照らす月涼し

奈良 高尾山 昭

白樺の坂をのぼれば夏館

名古屋市 可知 豊親

木の間より琵琶湖の見えるハンモック

神戸市 田中 忠士

豆詠者の問いまっすくに柿若葉

高槻市 タカハマカズコ

くちなはを見し草むらに踏み込めず

横浜市 斎藤 山葉

△評▽草むらを見ると、くねるように入む蛇の姿がよみがえり、足がすくむ。くちなはという呼び名も蛇の長さを思わせ恐ろしい気だ。

今日からはなにを食ふべき暑さかな

八街市 山本 淑夫

△評▽何を食べたらいいかわからないという嘆きが猛暑を表す。どうしようもない暑さだ。

夏木立風の在り処を見つけた

札幌市 岡崎 実

板敷きのうすき座布団泥鰌鍋

東京 徳原 伸吉

二十四の瞳の島の海開き

高松市 島田 章平

五月雨の音しみじみと古い深し

日高市 横田 武志

焼香に教へ子老いぬ百日紅

市川市 高野 厚夫

戦場に灼ける兵器やチェホフ忌

東京 野上 卓

ビル街の影を呑みこむ散水車

名古屋市 加藤 國基

どの竹も皮脱ぐひかり傾けて

福岡市 三十田 燦

滴りのかたちとなりて落ちにけり

川口市 高橋さだ子

△評▽岩肌などからしみ出した水がただ流れ落ちるのではなく、「滴り」といえば絵に描いたようなふくらんだ水滴を思ふのである。

藤椅子のいつしか猫のものとなり

東京 草野 准子

△評▽使い込んだものの心地よさは猫にとっても同じらしく、すっかり占領されてしまっている。

流灯を呑み込み波の暗さかな

枚方市 門川 清秀

村中の水のつながる青田かな

和歌山市 藤池 芳子

夕風や犬吠えてゐる町はづれ

神戸市 大田 雅一

たまに冷麦さうめんに少し飽き

和歌山 神野 一馬

囚はれの玉を転がすラムネかな

東京 高木 靖之

ネット裏最前列の麦藁帽

北九州市 篠原 敬祐

沙羅の花雨の匂ひの午後の風

羽生市 岡村 実

テーブルの上に歳時記明易し

奈良市 上田 秋霜

アプリで

推し短歌

アプリ「57577」の投稿からユーザー人気をふまえて歌人の天野慶さんが選歌と評を担当します。アプリは右のQRコードまたは<https://tanka.one/>からダウンロードできます。



短歌
アプリ

57577



お題「青」

・水は海、空気は空と、青くなり透明な日々は青春となる。美しい日本語BOTでのひらにすくい取った水は透明。でも、海も湖もプールも、たつぷりと水が集まれば青色に。そして見上げれば、青く広がる昼間の空。理科の授業で光の習性だと習っても、やっぱりなんだか不思議です。あの日々も、遠く離れて振り返ると「青春」という色になるのですね。

・(サムシングノマリッジノマタニティ)ブルー 寄せては返さずさなみの青 青木葉子 人生にふと現れる「ブルー」のつく言葉。さわやかなイメージのある青ですが、ここで使われるものは不安を可視化したような青ばかり。乗り越えてはまた現れる憂鬱なブルーを、静かにやって来る「さなみの青」と表現したことで、歌が光りました。

・全方位あおに囲まれ過ぎ 空、山、海、川と、浴衣、ソーダと 松井祥子 ぐるりと360度、どこを見ても夏です。ひとつひとつ指さすように夏の青色を挙げゆき、最後は手に持ったソーダ水。濃淡のある生き生きとした「夏」の点呼を終えてから、ソーダをぐっと飲み干して、夏を満喫するために駆け出してゆく下駄の足元が自然と浮かんできます。

●次回のお題「光」(9月1日掲載)